

「祖国」居場所なく「私たちは棄民」

忘れられた同胞

フイリピン残留2世

標高1500以上の高地もあり、移民の先駆けになった。冷涼な気候で知られるフィリピン・ルソン北部のミンダナオが発源地。持ち前の勤勉で財をなした人も多かつた。バギオに住むカルロ・ス・テラオカさん(88)の父親は日本人を食料外国人労働者建設関係の仕事を手がけ、多くに参加した。日本人の一部は現地に残るが、多くは帰国した。1941年8月に病死。12月には日本がアメリカと戦端を開き、まもなく日本軍がフィリピンを占領した。日本人学校は国民学校と名



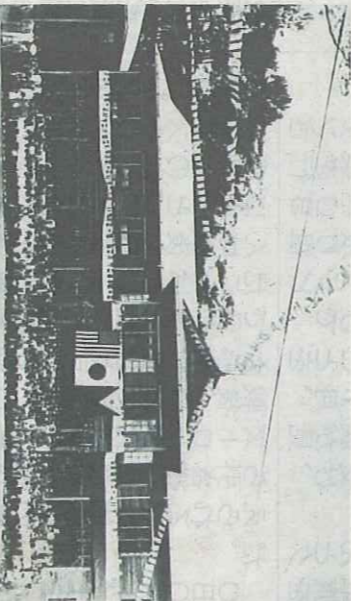
国籍回復へ「政府支援不可欠」

複雑な感情消えず

だが、戦火が広がるにつれ、日本人移民の立場は厳しさを増していった。カルロスさん船に乗り、父の実家がある山の上の兄はスハイ容疑を口実に「帰郷」した。日本入籍にいたため日本軍に志願したこともあった。機のパイロットになりたくて、妹と山へ逃げ、雑草を食べ、生き残ったカルロスさんは「この国に自分たちの居場所はない」と感じ、当時のフイリピン成人年齢である18歳境目の存在として、戦前から戦中にかけて中国東北部(旧満洲)に渡った中国残留孤児を連れてバギオに戻った。その後、実業家として活躍。日本のバギオ名誉総領事親の戸籍に登録する「就籍」がなされておけるためにも、政府の支援が不可欠だ。河合弁護士は強調した。



流暢な日本語で戦時中の体験や日系人の苦難について話すカルロス・テラオカさん(7月11日、フイリピンのバギオ市(橋本昌宗撮影))



バギオ市にあった日本人学校。バギオ市では日本人社会が発達し、多くの子供が通った1987年(NPO法人フイリピン日系人リーダーサポーターセンター提供)

手続き完了に50年

「中国は国策による移民で、フイリピンは自分の意思で行った移民といつ違いはあるが、戦争の犠牲者といつ違いはない」。中国残留孤児の就籍を手がけ、フイリピン残留2世の支援を続ける河合弘之弁護士はこう話す。フイリピン残留2世の平均年齢は80歳を超えるが、今も無国籍状態の1069人(今年3月時点)が就籍を待っている。当初は1~2年ほどかかった就籍の手続きは、今では最短1カ月でできるようになった。それでも、年間で行われるのは20件程度。すべてフイリピン残留2世に似た境遇の存在として、戦前から戦中にかけて中国東北部(旧満洲)に渡った中国残留孤児を連れてバギオに戻った。その後、実業家として活躍。日本のバギオ名誉総領事親の戸籍に登録する「就籍」がなされておけるためにも、政府の支援が不可欠だ。河合弁護士は強調した。

◆

この連載は橋本昌宗が担当しました。